

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H23. 12. 15)

1. 切断量の推移

(成品切板出荷+賃加工)

(単位:千ト)

項目	22年度		23年度			
	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	58 (1)	68 (1)	54 (2)	54 (2)	60 (2)	60 (2)
規格	484 (126)	447 (129)	434 (132)	474 (146)	470 (148)	490 (148)
合計	542 (127)	515 (130)	488 (134)	528 (148)	530 (150)	550 (150)

(出所)・実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

・カッコ内の数値は賃加工量で内数。

【コメント】

■ 23年度2Qの切断量(実績)は、前期比40千ト、8.1%増の528千トと3ヵ月ぶりに増加したが、前年同期比では3千ト、0.5%減と、依然低水準で推移している。

23年度上期計は1,016千トで、前期比▲41千ト、▲3.9%。

■ 3Q(想定)は、530千ト程度(前期比+0.4%、前年比▲2.2%)と想定。

・10月174千ト(前年同月比▲7.0%) + 11月速報175千ト(同▲4.4%) + 12月想定180千ト(同+4.0%) ≒ 530千ト

・20年度3Q:624千ト、21年度3Q:468千ト、22年度3Q:542千ト

■ 4Q(想定)は、550千ト程度(前期比+3.8%、前年比+6.8%)と想定。

・建設関連需要:前期比+5%、建産機関連需要:同+15%、その他:横ばいと想定。

・22年度:期平均520千ト、月平均:174千ト。⇒23年度4Q:183千ト/月

・20年度4Q:487千ト、21年度4Q:468千ト、22年度4Q:515千ト

■ 23年度計(推計): 2,096千ト。前年度比(2,082千ト)+0.7%。

・直近ピークの20年度(2425千ト)比 ▲329千ト、▲13.6%。

(参考) 切断量(成品切板出荷+賃加工)の前年同期比の推移

20年度1Q:+6.3%、2Q:+6.6%、3Q:▲3.3%、4Q:▲24.8%

21年度1Q:▲34.1%、2Q:▲37.9%、3Q:▲25.0%、4Q:▲4.0%

22年度1Q:+13.5%、2Q:+26.3%、3Q:+15.8%、4Q:+10.1%

23年度1Q:▲1.1%、2Q:▲0.5%、3Q(想定):▲2.2%、4Q(想定):+6.8%

2. 業 況

厚板シャー業界を取り巻く状況を概観すると、足元の全体的な需要回復感は未だ乏しいものの、前回報告時点（9月）に比べると、堅調な建産機分野に加え、建設部門においても来期以降ようやく大底を脱する動きが出始めてきた。すなわち、切板需要の過半を占める建設関連需要は、橋梁入札が3Qから本格化していることや、首都圏を中心とする大型建築案件の始動に加え、大震災で中断していた案件が再開し始めていることなどから、今後の回復が見込まれる。しかし、採算面においては、ゼネコン及びファブ間の競争激化、海外調達志向の高まり等により、引続き厳しい局面が続くようである。

他方、建産機関連需要は、油圧ショベルや鉱山機械を中心に好調が続いている。但し、先行きについては、円高等を背景に海外調達比率の上昇や、生産拠点の海外シフトの動きがここへきて一段と加速するなど、不安視する見方が強まっている。

当組合の月次統計により、足元の「切板需給」状況をみると、引続き低調に推移している。まず出荷量は、大震災が発生した3月以降、5月を底に、8カ月連続で前年水準を下回って推移している。仕入れ量も出荷減に対応して、4月以降、一貫して減少している。この結果、在庫量は、5月末をピーク（38万トン）に漸減傾向を辿った。しかしそれ以上に建設需要の落ち込みが大きかったため、在庫率は8月末213%、9月末204%、10月末202%と、適正レベル（200%以下）を上回って推移している。

来期以降の需給は、建設需要の回復につれて徐々に改善に向かうものとみられる。

こうした状況下、母材メーカーの販売姿勢は、完全に2極化の様相を呈しており、値差は大きく乖離したままである。急増する輸入材もこれに加わって、価格体系の多層化が定着しつつある。

シャー各社は、採算重視の観点から、逆ザヤ回避の一策として、合理的な材料選定を視野に入れながら、需要家ニーズにキメ細かく対応している。

全国のシャー各社の意見を列記すると以下の通り。（12/9 市場委員会）

- 道内の橋梁は道内ファブが順調に受注、下期の加工は上向き傾向。但しファブからの指値は一段と厳しい。（北海道）
- 被災した太平洋沿岸部のファブは復旧関連で忙しくなっているが、内陸部は冬場を迎え仕事が途切れがち、地域格差が出てきている。大型建築案件は他県に流れている。（東北）
- 需要の好転は早くて来年度以降とみられる。（東北）
- 一般店売りは低位安定が続き、相変わらず暗雲が立ち込めている。2Qからの回復に期待したいが、当面の1～3月をどう乗り切るか、ここが頑張り所だ。（東京）
- 量的にはある程度回復しつつあるが、ユーザーの低価格競争が激烈で「加工賃」が宙に浮いたままである。市場規模も縮小の一途をたどっているし、商売がやりにく

い環境としか言いようがない。(東京)

- 全体観として、震災の影響を脱して、円高の影響を受けながらも需要はおおむね好調。思うように採算ベースに乗せることはできないが、仕事量は確保している会社が増えている。(東海)
- いま好調なヒモ付きシャーも、ユーザーがどんどん海外にシフトしており、いかに海外の業者と戦うか、自分達も海外に出るのか、残るなら生産体制をいかに変えていくのか、海外の値段にいかに対抗していくか、多くの問題を抱えている。(東海)
- 橋梁の入開札は70%程度進んでいる。若干明るさも出て来たが、数量的には足りていない。関西の大型建築物件は少ない。関東の再開発案件に期待しているが、発注時期が見えていない。名古屋の駅前ビルにも期待しているが、ファブがまだ決まっていない模様。(大阪)
- 建築分野は大型案件がなく、小口中心である。比較的大きな案件は、病院・学校等の公共案件である。橋梁は秋口の案件が決まり出し、来年1月以降から動き出す見込み。造船はなだらかなピッチダウンが進行しているが、比較的堅調な生産を継続。但し月を追って輸入材が増えており、加工品の輸入も増加する可能性がある。(九州)
- シャー業者の仕事量は、加工賃アップまでは至っていないが、小口需要中心で10～11月はフル生産に近い状態。12月以降も仕事はそこそこ確保できそう。(九州)

以上のように、2年以上にわたり需要不振に苦しむシャー業界においては、ようやく量的には底離れの時期を迎えつつあるが、採算面の改善糸口が全く見えないまま、各社生き残りをかけて、頑張っている。

需要動向を概観すると、

(1) 建設機械は、油圧ショベルは内外需とも堅調を持続しているが、最大市場・中国において販売不振による現地工場の生産調整が始まっており、先行きが懸念される。鉱山機械は、資源国の旺盛な開発意欲に支えられて、各機種とも長期にわたる好調持続が期待されている。

重電関係は、原発事故により国内の原発案件はすべて中断・延期しているが、米国向け案件は計4基の受注があり、長期の安定加工段階に入っている。また、火力発電関連需要も内外需とも旺盛で、高操業が続いている。

(2) 建設分野については、まず橋梁は、23年度の入札量は、昨年度並みの286千トンと公表されており、入開札の本格化は、3Q以降と見込まれる。これがシャーの切断量に結びつくのは、4Qからの見通しである。

一方、首都圏の大型建築案件は、3Qから一部動き出しており、ファブの仕事量及びシャー加工量も増加する予定。また、震災で中断・延期されていたショッピングセンターや物流案件も再開されることから、今後の鉄骨需要は増加する見込み。

(3) 一般店売り分野については、主要分野である建築不振が響き、相変わらず惨憺

たる状況が続いている。各地区とも小ロット、短納期の商いが中心で荷動きは低調に推移しており、シャーの稼動も40～50%の低操業を余儀なくされている。

次に、母材供給面については、国内のメーカー・ロールは、内外需の低迷により一頃のタイト感が薄れつつある。こうしたなか、円高等を背景に、今年に入り韓国材の入着が急増しており、足元の供給事情に変化が生じてきている。

一方、全国各地の店売りマーケットは、需要の低迷に加え、高炉材・電炉材・輸入材の価格3極化や、需要家からの値引き要求が相次ぎなど、八方塞の状況が続いている。シャーは仕事量を確保するために、採算割れの取引を余儀なくされるケースが増えている。

実勢から乖離して高止まっている母材価格。来期以降のメーカーの販売スタンスがどうなるのか、最大の関心事となっている。

なお、シャー業界における当面の主要課題は、以下の通りである。

- ①建設分野を中心とする需給ギャップ問題
- ②母材価格3極化への対応
- ③適正加工賃の確保
- ④与信管理、雇用対策（助成金の申請、等）
- ⑤コンプライアンス対応（品質証明、独禁法、輸送条件問題、等）。
- ⑥円高進行と製造業の国内空洞化
- ⑦建築分野における輸入鉄骨問題

3. 足元の主要需要部門の動き

(1) 橋梁・建築鉄骨の動向

【全 体】

足元の橋梁・鉄骨分野は、依然低位な活動レベルを持続している。土木関連（セグメント等）の物件や一部の産機需要の増加により、若干カバーをしているものの、建材系シャーは厳しい状況に直面している。但し、各分野とも7月を底に、最悪期を脱しつつあり、ようやく底入れの兆しが出始めている。

今後の動向は、橋梁・鉄骨需要とも低レベルながら徐々に回復に向かうと見込まれることや、土木関連物件も年度内は一定レベルをキープすると見られることから、切板切断量は年末から4Q以降、増加傾向を辿るものと予想される。

【橋 梁】

本年度1Qの入札量（シャーの2Q稼動に繋がる指標）は、26千トンと少なかったことに加え、2Q入札量は増加したものの、開札（受注ファブの決定）が遅れたことにより、シャー加工量は、昨年度並みの低水準で推移している。

23年度の入札量は、既に286千トと公表されており、昨年度並み（283千ト／年）の規模になると見込まれる。入札案件は、関東地方整備局や首都高案件など関東地区案件が多いことに加え、開札案件も着実に伸びていることから、橋梁ファブやシャーの加工量は増加する見込み。

入開札の本格化は、3Qであることから、シャーの加工が本格化する時期は、4Q以降と見られる。一部のシャーでは、12月から加工量が増加する予定。

ただし、開札時期のズレ込み傾向は依然として残ることから、今後の開札状況を注視する必要がある。

【鉄 骨】

建築着工ベースの鉄骨需要量は、徐々に回復傾向を示しているが、絶対量としては依然低位にとどまっている。但し、昨年度後半にピークアウトした首都圏の大型案件は、物件数は少ないものの、着工され始めており、シャー加工量も回復基調にある。

3Qには、首都圏大型案件の着工規模が増加する見込みであり、それに合わせSグレードファブの仕事量及びシャーの加工量も回復する見込み。

引き続き首都圏再開案件の着工や、震災により中断・延期されていたショッピングセンターや物流案件の再開が見込まれ、今後の鉄骨需要量は増加する予定である。

ただし、絶対値としての規模は、依然低レベルであり、またゼネコン間やファブ間の競争状況に変化はなく、加えて海外調達志向も高まっていることから、採算面の厳しい状況は継続する見込み。

(2)建産機・重電・金属工作機械の動向

【全 体】

製造業の紐付きを主体とするシャーは、需要家の好調な輸出を背景に、高い操業を持続している。

一方店売り部門は、短期的に見ると、受注の増減はあるものの、依然低迷状態から脱出できないまま低迷している。

建産機系シャー共通の懸念材料は、円高の影響を受けた需要家の輸出減少や、海外調達比率の向上、生産の海外シフトであろう。数年前からの継続的な動きではあるが、ここに来てそのスピードは一段と勢いを増しているようである。さらに、中国の景気減速や欧州の債務危機により、投資環境は急変し、先行きは悲観的になっている。

【建設機械】

建機工業会の統計によれば、10月の出荷額は内外需ともに好調持続、前年比で22ヵ月連続の増加。

- ・油圧ショベル： 内外需とも堅調で、ミニショベルも含め増産傾向ではあるが、中国での販売不振により、現地工場では生産調整が始まっており、これが先行き輸出の減少に繋が

る不安が残る。他の新興国の需要が牽引してくれることを期待したい。

- ・ **建設用クレーン**： ラフテレーンは、一時的に復興需要とみられる受注があったものの、足元の引き合いは一段落している模様。それでも買換え需要は極端には落ちず、生産レベルはほぼフルの状態。輸出も大型を主体に回復しており、需要家の生産台数は震災前比+40%程度となっている。

クローラは、震災前に比べ1~2割増加しているものの、まだまだ低迷が長引きそう。新興国向けだけは増加基調にあるが、日本を含む先進国の回復遅れがそれを減殺している。

【鉱山機械】

大型ダンプ、大型・超大型ショベルとも、需要家の生産能力上限の受注が続いている。合わせて鉱山用の大型トラクター関連も好調の模様。資源国の旺盛な開発意欲に衰えは見えず、この部門は、生産の海外シフトの不安は一部残るが、長期にわたり期待が持てる可言えよう。

【重 電】

原発事故により、国内の原発案件は中断を余儀なくさせられているが、米国向け4基の原発案件はすでに進捗しており、当該シャーは長期の安定加工に入っている。

また東電管内における電力不足懸念は減少したものの、全国的な火力発電関連需要は旺盛であり、さらに海外向けの需要も好調で、足元高操業が続いている。

昇降機は、ピーク時からみると現在の生産基数は大幅減(△35%前後)となっているが、今年度の受注は前年比で若干増となっており、概ね安定した状態と言える。

【板金・鍛圧】

10月までの受注は、板金・鍛圧ともにピーク時の75%程度を維持(工業会調査)しており、概ね堅調。しかしながら、某社プレス機の海外生産移管が来年から開始されることや、全般に亘る海外調達比率の上昇、さらには中国の景気減速と円高による輸出減による生産調整等々、先行きが非常に不安視される。タイの工場水没の影響により、機械買換え需要が予想されているが、まだ具体的な商談はない模様。

【産機店売り】

前回報告内容とほぼ変化無く、一時的な受注増はあるものの、低迷状態が続いている。この部門も円高や海外調達・海外シフトの影響を受け、客先からは大幅な原価低減要求で苦慮している。

【参考】 成品切板の最終用途比率（平成 23 年 3 月出荷分。厚板シャー工組調べ）

・ 建 築 用 :	3 4 %	(3 7 %)
・ 土 木 用 (橋梁、鉄塔等) :	1 4 %	(1 7 %)
・ 建産機用 :	3 0 %	(2 6 %)
・ 輸送機用 (船舶、自動車) :	8 %	(8 %)
・ 重電用 :	2 %	(2 %)
・ その他 (鉄道車両、容器、二次製品)	1 2 %	(1 0 %)

(注) カッコ内の数字は、21 年 3 月時点の最終用途比率。

全国厚板シヤリング工業組合

シヤ業の厚中板在庫推移

(H23. 12. 15)

組合員の厚中板在庫推移(165社・6事業所／自社所有分)

(単位:千トン)

項目	22/12末	23/3末	6月末	9月末	12月末	24/3末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在庫量	349	365	370	370	360	350
前期比/量	▲8	16	5	0	▲10	▲10
前期比/%	97.8	104.6	101.4	100.0	97.3	97.2

【コメント】

- 在庫量は、大震災の影響等により需要が急減したため、漸増傾向を辿り、5月末には381千トンの高水準に達した。6月以降も、慎重な仕入れ姿勢を維持しているものの、需要減に追いつかず、37万トン前後で推移している。
- 一方、在庫率は、5月末には249.5%に達するなど需給が一気に緩んだが、その後建産機部門の回復が下支えとなって、9～10月は適正レベル上限の200%際まで低下。一時の過剰感が若干薄れつつある。
- 今後、建産機分野の堅調持続と建設需要の回復が見込まれる中、シヤ業者が需要に見合った仕入れ姿勢を堅持すれば、在庫量は12月末から3月末にかけて、35～36万トンまで減少するとみられる。
- 在庫率は、需要の回復いかんであるが、仮に月間出荷量が18万トン超のレベルで推移すると、12月末～3月末の在庫率は、適正在庫率(150～200%)の圏内まで低下するものと予想される。
- 需要全体の動きは、概ね回復基調で推移するものと期待されるが、先行きの不透明感は根強く残ることから、今後とも母材仕入れ及び在庫管理には細心の注意が必要である。

以上